

社会とリカレントを結ぶ

月刊 先端教育

INNOVATIVE LEARNING

特集1 知の変革、人材育成の転換

AIと共に働く未来

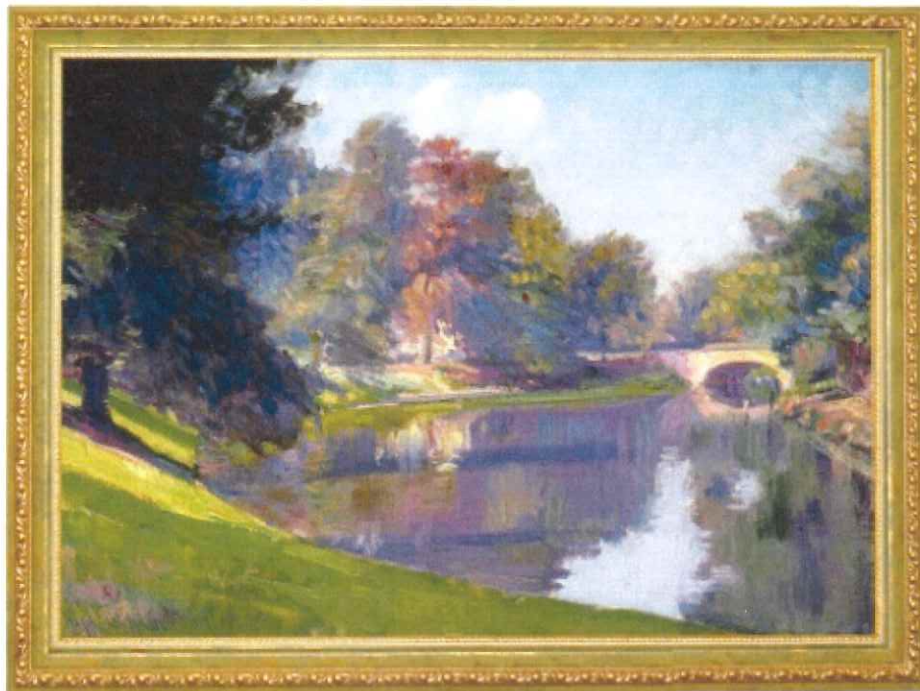
ビジネス領域で問われる新たな力

10月号
2025

特集2

多様な教職ルートで教壇へ

民間人校長の挑戦、キャリア教育改革



宮崎県

自ら挑戦する人を支える

連載 「越境」で個人の力を解き放つ



探究学習×キャリア教育

民間発想で切り拓く新たな学び 「360° キャリア探究」が描く未来

キャリア教育の重要性が高まる中、学校法人創志学園が運営する成女高等学校ではソニー出身の阪本浩氏が先導して独自の「360°キャリア探究」を推進。学校生活全体をキャリア形成につなげる教育改革を展開している。その狙いや具体的な取り組みについて阪本氏に話を聞いた。

企業での多様な経験を 探究型キャリア教育に転換

成女高等学校（東京都新宿区）が実践するキャリア教育は、他校にはない特色で注目を集めている。

その中核を担うのが、2019年に着任した阪本浩氏だ。ソニーで経営企画や海外駐在を16年間経験したのち、ITベンチャーを経て教育関連企業へ転職。同社でいくつかの新規事業を立ち上げた後、公教育の世界へ。経営改革を担う幹部職員として、2019年に同校に迎えられた。

「着任当初、教職員たちも本校には明確な強みがないと言っていたため、将来を見据え、教育の中身を抜本的に変える必要があると感じました」と阪本氏は振り返る。

教育改革の前に、まずは人事や労務管理などの体制整備に着手した。翌2020年度からキャリア教育につながる探究学習と表現教育を再構成した。同年に中学・高校英語の特別免許状を取得し、現在は英語と探究学習を担当している。

阪本 浩 SAKAMOTO Hiroshi

成女高等学校 探究・開発研修部

大学卒業後、ソニーで経営企画や海外駐在を16年間経験したのち、ITベンチャーを経て教育関連企業へ転職。同社でいくつかの新規事業を立ち上げた後、2019年、学校法人創志学園が運営する成女高等学校に着任、経営改革を担う。2020年度から中学・高校英語の特別免許状を取得し、現在は英語と探究学習を担当。また、探究・表現教育・リーダー教育の責任者を務めている。

同校では、阪本氏のビジネス経験を活かした「360°キャリア探究」を掲げ、学力・探究・非認知能力を全方位的に伸ばすキャリア教育を実践している。その名称には、授業・部活動・行事のすべてがキャリア形成につながるよう設計されており、大学名や偏差値にとらわれず、あらゆる進路を目指せる全方位対応型の教育という意味が込められている。

「高校時代のうちに、社会で活躍できる土台を築いてほしい」との思いからキャリア教育を中心に据えたと語る阪本氏。民間から教育現場に入って痛感したのは、学校と社会の間にある大きなギャップだった。

「インプット中心の学校とアウトプット中心の社会を、分断されないよう



にシームレスにつなげることで、高校生のうちから将来を具体的にイメージし、その準備を始められることが重要です。そのため本校のキャリア教育は、大学に進学させることだけを目標にするのではなく、将来誰かの役に立つ存在になることを最上位の目標に据えつつ、社会で活躍するために必要な力を高校時代から身につけていくことを目指しています」

こうした考え方は、同校が掲げる「自律・自立」の教育方針とも深く結びついている。

高校生活全体をキャリア教育の場として機能させることで、生徒一人ひと

とりが社会で力を発揮できる基盤を築く。それが阪本氏の描く「360°キャリア探究」である。

進路に合わせて複数のゼミを展開 「自主研究ゼミ」で将来を探究する

成女高等学校のキャリア教育の中核を担うのが、2020年度からスタートした「自主研究ゼミ」だ（「総合的な探究の時間」で実施している）。

従来の探究学習を大幅にリニューアルし、研究テーマを大学の学部・学科と明確に結びつけ、進路との関連性を重視している点が最大の特長だ。生徒自身の得意分野や好きなことを自分の将来に繋げていくために、主体的に探究できる仕組みを備えている。

高校1年生の前半は、ゼミ活動に入る前の準備として「探究基礎」を実施する。問いの立て方や仮説の設定、調査方法を実践的に学び、9月にはポスターセッション形式で成果を発表する。「探究基礎」を担当する阪本氏は、「まずは探究の意味を理解し、フィールドワークを取り入れながら自ら調べ、考える力を養います」と語る。特に重視するのは「課題解決につながる問いを立てる力」だ。

「現実的で意義ある問いをどう立てるか、そのプロセスを丁寧に積み重ねることが重要です」

「探究基礎」を経て、生徒は人文・芸術・社会・生活・自然科学の5分野からゼミを選択。年度途中でも進路変更に合わせてゼミの変更が可能で、総合型選抜や学校推薦型選抜にもつながる構造となっている。自然科学ゼミの希望者が多く、「おにぎりのカビ防止」「生理痛の緩

和」など、生活に密着したテーマが目立つ。

また、研究成果を発表する場も豊富に設けている。毎年2月には全校でのプレゼンテーションを実施し、学校説明会では在校生が自らの研究テーマを紹介する。これをきっかけに中学生が自然科学に興味を持つケースも増えているという。

2年生からはグループでの研究を離れ、各自のテーマに基づいた個人研究に移行する。7月に研究構想を発表し、2月の最終発表を経て、3年生で研究を深め、卒業論文としてまとめ上げる。この成果は大学入試にも活用される。

また、高大連携を早期から行っている点も大きな特長だ。高校1年生の後半から、ゼミに合った学部のある大学8校と連携し、教授や学生との交流を重ねる他、大学の実験施設・研究設備も活用。高校の枠を超えた環境で学ぶことで、大学での学びを具体的にイメージできるようになっている。

さらに企業連携にも力を入れている。ゴディバ ジャパン、第一三共ヘルスケア、花王などと連携し、社会課題と直結した探究活動を展開。現場での経験がキャリア理解をより実践的に深め、課題解決力の育成にもつながっている。こうした取り組みにより、探究学習は単なる入試対応にとどまらず、社会が求める人材に必要な力を育む機会を提供している。実際、高校で研究した内容を大学で継続して研究し、さらにそれを活かした仕事に就職する卒業生も出てきている。

キャリア教育の礎を築く 表現教育とリーダー教育

キャリア教育を支えるもう一つの柱が、2020年に始まった「表現プログラム」だ。その目的は「一言で言えば、自己表現力の育成です」と阪本氏は語る。

「着任当初はおとなしい生徒が多い上に自分の考えを言語化することが苦手な傾向があると感じました。しかし、社会で活躍するためには、自分の考えや得意なことを言葉にして伝える力が不可欠です。そのため、『自分を知り、自分を認め、そして表現する』というサイクルを繰り返すことで、自己肯定感を高めていきます」

「総合的な探究の時間」の一部に組み込まれた同プログラムでは、ボイス・トーク・エッセイ・ヴォーカル・デザイン・フォトの6クラスから各学年で1クラスずつ選択し、3年間で最大3ジャンルを学べる仕組みになっている。各分野の専門家を外部講師として招き、一般教科では得られない実践的な指導を行う。

例えば、「トーククラス」では現役フリーアナウンサー、「ヴォーカルクラス」ではミュージカル俳優、「フォトクラス」では写真家・アートディレクターが担当している。いずれのクラスも成果発表の場として、2月に開催される「パフォーマンスフェスティバル」で日頃の学びを披露する。

さらに、今年度から「360°キャリア探究」の一環として、非認知能力の育成を目的とした「リーダーシッププログラム」を新設した。

「表現プログラム」が必修科目であるのに対し、こちらは選択科目として



「自主研究ゼミ」での研究内容を発表する生徒の様子。



「リーダーシッププログラム」に参加する生徒たちと阪本氏。

導入する。現在は3年生限定の自主参加で試行し、来年度からは「総合的な探究の時間」の一部として実施していく予定だ。

「表現力は自己実現に不可欠ですが、社会では協働力も同じくらい重要です。今の時代、一人で完結する仕事は少なく、仲間とどう動くかが求められます。そのため、リーダーシップを体系的に授業化し、授業での学びと学校行事・部活動での実践を組み合わせることで、一人ひとりがリーダーシップのある行動を取れることを目指しています」

プログラムは導入編と実践編で構成される。阪本氏が担当する導入編では、多様な題材を使って、自分の意見をつくる方法を学びつつ、フレームワークを活用して意見のつくり方を整理していく。次に、目標設定や話し合いを効果的に進めるためのスキルをグループワークで確認する。

「多くの生徒は意見がないのではなく、実は曖昧なまま話しているだけだったりします。そのため、まずは絵画を見て気づきを自由に発言し、次に選択肢から立場を選ぶ練習などをします。こうして一歩ずつ段階を踏むことで、発言の心理的ハードルを下げ

る工夫をしています」

実践編は、ハーバード・ケネディスクールのハイフェッツ氏のメソッドを継承するリーダーシップコーチの水上雅人氏が担当する。

「リーダーシップは才能や能力ではなく行動である」という理念のもとに、身近なケースを題材に対話を行い、日常生活で実践するサイクルを繰り返す。そして、周囲を動かすために自らの成長が必要であることを理解し、行動に移す力を養う。

着実な改革の先に目指す スーパーキャリアハイスクール構想

阪本氏は、民間企業から学校現場に転じた自身の経験を「教育の多様性を広げる一つの形」と位置づける。画一的な価値観に偏りかねない学校組織に、異なる視点を持ち込むことで、新しい教育の可能性を拓きたいと考えている。

着任当初は経営や組織面の改革から着手し、教育内容の刷新は段階的に進めてきた。現在も、従来の学校では手が届きにくかった領域に挑み、キャリア教育

の中核を担っている。こうした取り組みが評価され、「第16回キャリア教育優良学校 文部科学大臣表彰」を受賞するなど、成果は確実に表れている。

今後は、文部科学省が認定する「スーパーサイエンスハイスクール」や「スーパーグローバルハイスクール」に続く形で、「スーパーキャリアハイスクール」といった事業が創出されることを期待していると阪本氏は強調する。キャリア教育の新たな構想を日々描いている。

「高校生活そのものをキャリア教育の場にし、社会につながる力を育むモデル校を目指したいですね」。そう語る阪本氏の挑戦は、着実な積み重ねの先に続いていく。



「表現プログラム」の6クラスの一つ「トーククラス」の様子。生徒はステップアップしながら人前で話すことが平気になれるようトレーニングしていく。